

肝炎研究推進戦略中間とりまとめ（概要）

1. 課題

① B型肝炎

- 創薬実用化に向けた研究において、実臨床への応用には至っておらず、B型肝炎の患者数はいまだ減少していない。
- 創薬に資する研究は引き続きの重点課題であり、B型肝炎からの発がん機序解明についても解明すべき課題である。

② C型肝炎

- C型慢性肝炎や代償性肝硬変に対するインターフェロンフリー治療によるSVR（ウイルス持続陰性化）率は95%以上を達成したが、薬剤耐性ウイルスや非代償性肝硬変に対するSVR率の改善やウイルス排除後の発がん等、解決すべき課題が残されている。

③ 非代償性肝硬変

- 肝硬変から肝発がんする割合が高いことから、早期に非侵襲的に線維化の評価を可能とする方法の確立が必要である。
- 肝移植に代わる治療がなく、臨床応用可能な抗線維化薬の開発が喫緊の課題である。

④ 肝がん

- 発がん機序の解明に資する研究が生命予後の延長に必要である。

2. 戦略目標

① B型肝炎

- 核酸アナログ製剤治療による累積5年HBs抗原陰性化率を現状の約3%から約5%まで改善。

② C型肝炎

- C型慢性肝炎、代償性肝硬変におけるSVR率を現状の約95%以上から100%まで改善。
- C型非代償性肝硬変におけるSVR率を現状の約92%から約95%まで改善。

③ 非代償性肝硬変

- 2年生存率をChild Pugh Bについては現状の約70%から約80%、Child Pugh Cについては現状の約45%から約55%まで改善。

④ 肝がん

- 年齢調整罹患率を現状の約13%から約7%まで改善。